

特別寄稿

晩年の身辺と出版構想の一斑

稲相 加賀 敏茶 羊大

本当の仕事は今から、と思いつながらも、齢七十を過ぎ、体力の衰えにも自覚があった。

『中務』の後書き(平成十年十二月)には、「私ももう七十才、資料を踏まえた細かな仕事を続ける気力が失せてきた」とある。平成十一年七月、半年の北米・欧州在外研修から広島に戻って久しぶりに会ったが、いつのまにか、皮膚からすっかり艶が失われていた。本人は毎年一本ずつ歯の抜けることを揶揄し、足首の故障を自前で直すことに、傍から見れば、いささか滑稽な情熱を燃やしていた。その後『中務集』の本文研究は、由良琢郎氏主宰の『礫』誌に平成十二年十二月まで、計七十八回目を掲載したところで中絶。同じ『礫』に先行連載されていた松尾聡先生の「日本語遊覧」は、百回まで続いた。それに肖って、自分も百回までは書くか、などと言っていたが、果たせなかった。自宅のワープロを開いてみると、第七十九回分の未定稿が、未発送のまま残されている。複雑な錯簡の状況を前回に図示しておいたのに続き、この錯綜をうまく腑分けする腕の見せ所、ひとつの山場を迎えていた。だが、ほぼ連載一回分の紙面を費やししながら、なお決定的解決には至っていない。『礫』連載のための資料一式は、主を失った今も、書齋代わりとなっていた六畳の隅の、ピアノの鍵盤下の畳のうえに、ごちんまりとしたひと山になって積まれている。

*

昨春より消化器の不調には気づいていて、その詳細は日記『風塵』にも、それ以外の膨大な記事の随に、事細かく書き留めていた。二十年来六十四キロだった体重が、平成十二年二月五日には三キロほど落ちていた。三十年来経験したことな

い下痢や便秘も何度かあり、腹部が重たい、という自覚はあった。さらにぼんやりとした疲労の取れぬことを、日記にもしばしば漏らしている。だが、取り立てて痛みなどなかったこともあってか、掛かり付けの心臓循環器専門の医師に殊更告げられることもないまま、安田女子大学学長特別補佐の仕事、大学院の運営と関連する文書作成に、文字通り明け暮れていた。たまの休日は、庭木の剪定と書籍の整理、郵便物への対応と原稿執筆、という日常だった。田中貴子さんの河合隼雄氏の著書への書評、「猫の目から世間を見れば」を読んで、「『猫くりこ筆の代作』というやり方、私の上をいきましたなあ」との感想が息子宛ての六月十五日の手紙に見える。デスマス調を息子への手紙に交え始めたのはこの両一年。老年の低姿勢とは、こういうものか、と内心複雑だった。同じころニューヨークはコロンビア大学の鈴木登美さんから、彼女と亭主のハルオ・シラネ教授のお弟子で、稲賀敬二オタクの米人学者、ニューハート氏の面会希望を取り次ぐファックスが入る。伊勢から源氏の受容史を志すという若者に、老国文学者は、これでは話題が広すぎて「やり方によっていろいろだなあ」と、いささか持て余した様子。「まあゴアイサツという所だね」。朝日新聞日曜版の「名画日本史」第一回の源氏物語絵巻の特集で業績に言及され（二月九日）、まがりなりに国際的にも認知されるようになった。そんな己が晩年への、銜いなき自負。同じ書簡には、ついで以下の情報。

「衆々園の公民館で三度、実はペロー童話集とグリム童話集の同一話の違いなんかは今回の準備ではじめて知った。短歌誌『真樹』の七十周年記念会の講演というのは昨日しました。広島市長まで来賓アイサツ（中略）。あと一つが寂聴源氏大賞、これをすまずと、あとは当分おしゃべりに出向くのはおことわりにしように思っている」。衆々園では、五月二十九日の一回目には『万葉集』の竹取翁から現存本へ、六月五日の二回目には、「シンデレラと落窪・住吉」、六月十二日の三回目に「浦島」。同日の日記には、「すんでの所で明後日、岡山清心に講演に行くのを忘れるところだった」。毎日の大学勤務の多忙を縫っての講演の連続だった。六月十七日『真樹』の講演は、その要旨「古今集と伊勢・大和の物語」が、同誌西暦二千年一月号に収められ、また当日の速記録が、山本光珠様のご尽力により、同誌二千年七月号から三回連続で掲載の予定。そして六月二十七日、源氏大学の講演、「散逸した巻々と現存の物語」は、講談社の渡邊綾子様のご助力もあり、追って講義

録としても出版された。こうした一連の講演のあと、しばし一休み、との意識はあったのだろう。だがご本人としては、よもやこれが今生での最後の公開講演になろうとは、この段階ではまだ夢想だにしていなかったらしいことも窺われる。とはいえ二十八日の日記には「この数日疲れがひどい。梅雨期のせいかな年のせいかな」とある。『真樹』の講演の際に撮られた写真を見ても、病的な瘦身の傾向は、すでに覆いがたく顕著だった。

六月十五日の手紙に戻れば、このころから小学館の堤中納言物語、第一学習社の国語教科書など、校正が殺到し始めた様子。「昔のようにキチンと校正読む気力体力がなくなつたね（暇がないせいだが）。大変だ大変だといながら、休日の日は半日庭木を切り、夜これを燃やすのに番する。これで庭がきれいになっていてる時が一番心休まるね」。七月に入ると、日本全国は記録的な猛暑を迎えた。「暑さの絶頂の様子なり」（日記、七月二十二日）。「最終稿読む元気は今のところなし。校正の体力がないという事は、本を作る能力なしという事なり。研究者として終末期を迎えたな」との自嘲が日記に見える（七月二十五日）。慢性的な疲労はますます酷くなり、無上の楽しみだったらしい庭木弄りも、小一時間もすると止めにし、そそくさと家に退避することが多くなった、と母は回想する。

「くどくなる 気短になる 愚痴になる 心はひがむ 身は古うなる」

出典記載はないが、平成十二年の残暑お見舞いに見える文面。自己採点では「身は古うなる」（老朽化身体疲労）に該当のマル、それ以外の三項は三角、高齢率50%とやらの診断を下している。実際には、くどくも、気短にも、ひがみっぽくも、愚痴っぽくもなれずに、聡明なまま最期をまつとうできたのだが、だがこれと同じ頃から、ようやくの夏季休暇を活用して、深夜に至るまで「物に憑かれたように」（母の観察）論文執筆に打ち込み始めている。「宇治十帖の右近は難物なり」（七月二十九日）。『真樹』原稿了（八月三日）。「前田氏の原稿約三十枚はかいたので、明日完成すべし（源氏右近の論なり）」（六日）。

「久下氏の狭衣も四十枚で完成したことにする」（十日）。「その補足を王朝細流抄くらいに書くか。年立の問題なり」（十一日）。「山路の露の現代語訳残り二十頁分をすまずため取りかかる。八月二十日までは解説等々完了すべし」（十三日）。「山路の露」・二類本の祖形補完想定理論化できることに気が付いた。収穫なり」（十四日）。この間親族、永年の親友の家族にいく

つか悲報などあり、長文の記載からも対応への気遣いが分かる。それとともに八月二十九日「医者に行くのをケロリと忘れていた。それほど狭衣に熱中していたということか」などの記述(二九日)。都合夏中に五本の論文をものし、その生産性には、我ながらいたくご満悦だった、と母は言う。一方「私も明年度一杯で『大学行政からは』身を引くべし。然しそこまで持つか、体が(二三三日)といった記述も。

九月二日「三九度のところもあつたよし、暑し」。新学期が始まるや、大学行政と教科書執筆で、論文執筆は、またしてもお預け。「先日、久保田淳氏から頼まれて、明治書院の和歌文学大系の「中務・信明集」引き受けることにしちゃった。やり終わるだけの体力があるのかしらんとも思うが、サライ年の夏頃は、安田を辞めて？いるだろうから、何とか形がつくかしらん(息子宛て書簡、九月一日)。「休日(本日は医者にも行かず)。夕方「物語流通機構論」の目次輪郭なる。これ本気で一年かければ三百頁位の本ができるのだがな」との詠嘆(日記、九月二十六日)。九月二十八日には「階段一階分で足が疲れ胸苦しくなるのは、さてこれは何であろうか」。学生からも顔色悪いと指摘された由。十月一日「内職各所故障し始めたかな」。三日「右胃やはり重い。カイヨウだな」。五日「二日便通なし、珍しきことなり」。六日「午後演習の途中一時半地震(震源は境「港」米子辺マグニチュード七あたり)」。十一日「地震で半壊と判明した、境港の家」解体撤去を決意」。この非常事態ゆえだろうか十一日には「体の具合の悪さはどこかヘケシトンダ！」とうれしそうに記している。だがぬか喜びもつかの間、十四日には再度体調悪化の記述。

十月十五日、ドイツ出張直前に偶然暇ができて帰広。刈った草を裏庭で焼いている父を夕刻の闇のなかに見て、そのあまりの瘦せ具合に、これは末期癌で余命はあと半年、と素人ながら直観したことを、今に思い出す。この時たまたま今道友信先生の『知の光を求めて』を持参していて、見せたところ、読みたいというので置いて行つた。父の没後確かめてみると、あちこちに黄色のマーカで線が引いてある。「自分の決心で学問のほうをとらずに、人間の道を選んだ、というその言ひ方に、誰でもが感じとる大きな矛盾や間違つた責任意識を私自身も感じとるからです。でも人間というのはそんなものなんでしょう(一二三頁)」。ここには、結局大学紛争ののち、今道友とは違つて、二度と学問の世界に沈潜する機会を得られぬ

まま、生涯を終わろうとしていた父が、自分を納得させようとした姿勢が透けて見える。またガブリエル・マルセルが今道友氏に送つた言葉、「Bene latuit, bene vincit. よく隠れしものは、よく生きたり！世の波に浮かんで風に消える声を立てる必要はない。海深く沈んで波を起こすのが」、それが学問だ、という一節(一二八頁)。ここにも、文献学者という、いわば地味な学問に生涯を捧げた学究にとつての、自らの選択を認めてくれるラテン語の諺に接しての、共感のようなものを読み取つてもよいだろう。

十一月二日に境港の家の処理に向かい、六日広島に帰着。到着時点で疲労困憊、自力では玄関で靴も脱げなかつた、と母は言う。さすがに周囲の説得に屈し、大学の研究科委員会の日程と睨み合わせて、十一月九日に横殿クリニクで診察。本人にはぼかして説明されたものの、ここで末期癌であることが確認された。十二月十一日、ハイデルベルクの息子への手紙「ドウモ、アンマリ景気のよい話じゃないけれど」と断つて、境港撤収の顛末と、「胃潰瘍」の報告(この文字の下に、珍しく何かを書こうとして、思い止どまった形跡)。この時点で体重は既に五十二キロとなつていた。「五〇キロを切つたら、その辺りで改めて対策を考えてみることにする」。横になると肩が痛むので、「結局夜明けから熟睡することにして、夜半はコタツに向かつて読書というのが一番楽な過ごし方かただね」。後から思えば、この段階ですでに頸椎への転移があつたものと推測される。折から再版された岩波文庫、中村善也訳のオウィディウス『変身物語』がお気に入りだつたらしく、論文を書く元気はないのでといって、原稿用紙の裏に六枚ほど詳細なメモを取つていた。元気になつたらエッセイのひとつも書くつもりだつたらしい。明け方、すっかり痩せた顔と体に、眼光ばかり爛々と輝かせて、読書に勤しんでいた、と母は回想する。この段階で、余命はあと一、二カ月程度というのが、専門医師団のお見立てだつた。口には出さなかつたものの、本人もこの頃、内心では一番葛藤もあつたのだろう。「胃潰瘍」説に縋りながらも、死を視野に入れ、かつやり残しの仕事を睨み、またいかにして社会的な責任を全うし、日常をどこまで維持して生涯を貫徹するか。

このあたりから後の状況は、ご寄稿を戴いた先生方もお触れになることだろう。ことさら病気を秘密にする意思があつたわけではない。むしろ皆様に無用な心配をさせたくない、との気持ちが強くと、またたつたひとりで介護に尽くす母の負担を

思つての配慮もあつたのだろう。一月末に癌の告知を受けるや、自ら率先して提案した手術が成功し、なお二カ月余の余命を得た。手術直後、病院に待機した母から病状の絶望的なことを告知されても、動揺する様子はなかった。生きる意志は貫いたまま、身体状況は冷徹に観察し、社会的な義務には、三月末日ですべて自ら決着をつけ、新年度早々の四月十一日に永眠した。死の前日まで、来信には可能な限り誠実に対応した。それができなくなつたら人間廃業だとの思いもあり、世界と自分との繋がりを最期まで確保したい思いもあつたのだろう。最後の三ヶ月はもっぱら母による口述筆記ではあつたものの、三月四日には、大学院生の見舞い状に答えて、ベッドにねそべる猫の戯画を、入院先で描いて見せた。自宅療養に戻つて二週間余り、二十四日には芸予地震発生。自宅も半壊以上の損害を被つたが、呉で被災した知人への見舞いなども小まめに綴つていた。葬儀の際にも申し上げたが、四月三日、息子の中国出張に伴う別れの日も、話題はといえば、謹呈を受けたばかりの論文を呼び水とした、さる写本群の来歴復元に関する推察だつた。つまらぬ弱音を吐いたり、悟つたような人生訓を垂れるよりは、最後まで自分の頭脳を信じ、学問に喜びを見いだし、平常心をもつて是とし、自分の死をも達観して、静かに準備を整えていた様子だつた。徐々に食欲も失せ、やがて指先の自由も失つたが、ぎりぎりまで自力で起き上がり、生への意欲は失うことなく、毎日最善を尽くそうと工夫を惜しまず、しかし死を目前にした心境は、最後の一週間、憚らず極力テープに録音しようと努力した。何時ものとおりの、周囲への配慮は欠かすことのないまま。

*

今日になって、平成八年五月執筆の、法的根拠はない「遺言にかえて」なる文章が、二巻前の日記の末尾に見つかった。その二条に「葬儀は公的に行わず、安田女子大学 高木泰孝氏(神主)に依頼し、家族のみにて執行。香奠などは辞退」とある。そういえば昔からそんな事を言つていたナ、と改めて記憶が蘇る。いささか遺志に反するお祭りとなつたかも知れず、またこうした追悼号の企画にも、ご本人は泉下から、オイオイやめてくれ、ガラでもない、とさぞや照れ臭がつていたことだろう。ましてや遺族がながながしい文章を寄せるなど、故人の謹みとは正反対の愚行にも思える。だが遺された者には、故人

を裏切るることによつてしか、故人を偲ぶよすがもない。編集部のお望みの文章とは掛け離れたものとなつてしまひ恐縮至極だが、これをもつて、取り敢えず、「特別寄稿」なるものの責めを塞ぎたい。

故人が病床でなお情熱を傾け、その一部をテープに吹き込んでいた「物語流通機構論」、あるいは講談社とお約束のあつたらしい新書の件など、遺稿の出版も、けつして容易ではないだろう。だが本特集の企画発起人の諸先生、編集実務にご尽力戴いた妹尾好信先生をはじめとした多くの方々のご助力を得て、せめて広島平安文学研究会に対するしかるべき義務だけは、遺族としても最低限果たしたく思つている。この場をお借りして、最後に一言お願い申し上げることを許されたい。なにとぞ今後ともご助力を賜れば幸いに存じます、と。

平成十三年六月二十六日

故人没後百日祭と境港での納骨を前にして

(いなが・しげみ／国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学助教授)

『平安文学資料稿』(第三期)の一案内

- ◇巻数を困んだものが既刊です。
- ◇原則として購読会員にのみ頒布いたします。
- ◇購読会員には、本誌『古代中世国文学』を差し上げます。
- ◇詳しくは本会事務局までお問い合わせ下さい。

○第六巻 伊勢物語古註 室町鈔 (広島大学蔵) 上

具惠卿 校

(第五回配本 平成十年四月刊)

頒価一四〇〇円

○第七巻 伊勢物語古註 室町鈔 (広島大学蔵) 下

具惠卿・藤川功和 校

(第六回配本 平成十一年三月刊)

頒価一四〇〇円

○第八巻 歌道秘伝書 (広島大学蔵)

山崎真克 校

(第七回配本 平成十一年七月刊)

頒価一五〇〇円

○第九巻 源語類聚抄 (広島大学蔵) 上

井上新子・赤迫照子 校 《次回配本》

○第十巻 源語類聚抄 (広島大学蔵) 下

校訂者未定

○別巻一 佚名 源氏物語梗概書 (広島大学蔵) 上

稲賀敬一・妹尾好信 校

(第八回配本 平成十一年十二月刊)

頒価一四〇〇円

○別巻二 佚名 源氏物語梗概書 (広島大学蔵) 中

稲賀敬一・妹尾好信 校

(第九回配本 平成十二年七月刊)

頒価一四〇〇円

○別巻三 佚名 源氏物語梗概書 (広島大学蔵) 下

稲賀敬一・妹尾好信 校

(第十回配本 平成十二年十二月刊)

頒価一五〇〇円

○第一巻 定家流 伊勢物語 千金莫伝 (広島大学蔵)

妹尾好信・辻野正人・森下要治 校

(第一回配本 平成七年七月刊)

頒価一四〇〇円

○第二巻 冷泉持為注 古今抄 (広島大学蔵) 上

田野慎二・山崎真克 校

(第二回配本 平成八年五月刊)

頒価一五〇〇円

○第三巻 冷泉持為注 古今抄 (広島大学蔵) 下

田野慎二・山崎真克 校

(第三回配本 平成九年五月刊)

頒価一五〇〇円

○第四巻 伊勢物語 遣遙院御抄 (阿波国文庫旧蔵・広島大学蔵) 上

妹尾好信・安道百合子 校

(第四回配本 平成九年九月刊)

頒価一四〇〇円

○第五巻 伊勢物語 遣遙院御抄 (阿波国文庫旧蔵・広島大学蔵) 下

朝倉和・猪川優子 校

(第十一回配本 平成十三年九月刊)

頒価一五〇〇円

編集後記

二十一世紀最初の号を稲賀敬一先生の追悼号として編むことになるのは、まことに残念である。毎回「編集後記」の内容が暗いというご意見をよくいただき、現今の大学、とりわけ文学部、中でも国文科のおかれている状況を思うとついつい暗くなってしまふのだ。が、せめて新世紀の第一号は明るい内容にしようと思っていたのだが、そうはいかなくなってしまった。

稲賀先生は、本研究会ならびに本誌の生みの親である。伊井春樹氏によれば、広島平安文学研究会が発足したのは昭和四十一年の春のことらしい。稲賀先生三十八歳の時である。平成九年八月に発足二十周年を記念し、併せて先生のお祝いする意味もこめて「稲賀先生を囲む会」を催した。その席で、私は、二十年後に五十周年記念と平寿のお祝いの会を開くまでお元気でいていただきたいと申し上げた。先生は、と

てもそんなにはもたないよと笑い飛ばされたが、決して夢物語だとは思わなかった。実現できることだと思っていた。それなのに、平寿どころか喜寿さえ待たずに逝ってしまったわかれるとは、全く断腸の思いである。

先生は、私たち門下生にとつてつねに精神的な支えであっただけでなく、そのお仕事を通じて学問に対する情熱と愛情を身を持って示し続けて下さった。支えを失った空虚感の中、先生がこれからなされるはずだったお仕事を思うと、無念至極である。

先生のお人柄からして、大げさな追悼企画は好まれないだろう。しかし、先生の創刊された本誌でささやかな追悼記念号を作ることはお許し下さると思う。本号を謹んで先生のご霊前に捧げ、ご冥福をお祈りするとともに、我々門下生の今後を見守って下さるようお願いするばかりである。

最後に、今回の追悼企画にご賛同いただき、ご多忙の中追悼文をご寄稿下さった諸先生方や門下生の方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。(妹尾記)

古代中世国文学 第十七号

平成十三年九月三十日 印刷

平成十三年九月三十日 発行

(非売品)

発行者 広島平安文学研究会

(代表 妹尾好信)

発行所 (〒七三九一八五三二)

広島県東広島市鏡山一―二―三

広島大学大学院文学研究科内

広島平安文学研究会

電話 (〇三〇) 四六六九

振替 〇三〇〇―〇七三

印刷所 株式会社カトープリントメディア

〒七三九一八五三二